

第1回京丹波町総合計画審議会 概要

開催日時 令和4年6月29日(水) 14時00分～16時00分
開催場所 京丹波町役場 大会議室

【会議資料】

- 資料1 京丹波町総合計画審議会委員名簿
- 資料2 京丹波町総合計画審議会設置条例
- 資料3 第2次京丹波町総合計画及びまち・ひと・しごと創生の計画期間、推進体制等
- 資料4 第2次京丹波町総合計画（前期基本計画）の評価まとめ
- 資料5 第2次京丹波町総合計画（後期基本計画）骨子案
- 資料6 第2次京丹波町総合計画（後期基本計画）の策定に向けたワークショップ資料
- 資料7 第2次京丹波町総合計画（後期基本計画）の策定の流れ
- 資料8 京丹波町総合計画審議会部会の編成
- 資料9 京丹波町総合計画審議会部会設置の規定

【次第】

1. 開会
2. あいさつ（会長）

連日暑い日が続いており、毎日のように新型コロナ、熱中症のニュースがある。現在の状況と、必要な対策が論議されている。このような状況の中で、事務局と相談しながら、基本的な感染防止対策を行い、本日の開催に至った。本日は前期基本計画の推進状況、骨子案、今後のワークショップ等について、ご確認いただく。また、例年の地方創生に向けて策定した総合戦略の評価について、事前にご意見をいただいております。事務局にて取りまとめている。本日はこれに加える形でご意見をいただきたい。コロナ禍であるので、会議も時間を短縮し、実のある議論を行いたい。

【町長挨拶】

いつも、皆様にお世話になっていることにお礼を申し上げます。梅雨が明け、天気が驚くほど良い。田んぼや畑の水の不足、飲み水の不足などの心配事が多く出ている。そのような中、集まってきたき、大変ありがたい。総合計画は、京丹波町のまちづくりの最も重要な計画である。皆様もよくご理解いただいていることと思う。昨年から引き続き、後期基本計画の策定を行うことになる。今後も何回か会議を開催していくため、ご負担をかけるが、ご協力をお願いしたい。社会情勢の変化に対応した計画策定が必要になる。コロナも出口が見えてきてはいるが、まだ油断はできない。国際情勢も大変な中で、京丹波町も、こうした状況と無縁ではない。ど

うしたらより良いまちになるか、常に考えていく必要がある。

京丹波町は京都府のほぼ中央部にあり、人が集まりやすい地理的状况にある。にもかかわらず、少子化、高齢化、過疎化が進み、人口減少が進んでいる。高齢化については事実であり、悲観はせず事実として受け止める必要がある。まちは、基本的に元気である必要があり、町民の皆様の健康寿命を確保し、元気でほがらかに活動していただくことが、元気な町につながる。子どもからお年寄りまで健康でくらしただけのように、そうした視点でウェルネス京丹波を提言している。丹波自然公園には素晴らしいトレーニングセンターもある。こうした資源を活かし、身体と心の健康の確保につなげていただく必要がある。

また、京丹波町には美味しい農産物、畜産物がある。京丹波町は食のまち、というイメージを高めていく必要がある。産業構造を統計的にみても、食品製造業が占める割合が高く、付加価値の産出額でも食品製造業が3割を占めている。また、農林業も主要な産業である。今後は食と農を組み合わせ、一層、食のイメージを高めていく、京丹波町フードバレー構想を進めていく必要がある。

また、少子化で子どもが少ないからこそ、教育に投資をしていく必要がある。まちづくりはひとづくり、ひとづくりはまちづくりである。教育環境を整えれば、京丹波町で子どもを育てたいという方も増えると思う。

最後の一つはふれあい。京丹波町民が互いにふれあい、仲良くしていくことが必要。社会の中で、人は一人では生きていけない。ふれあいでは得られないものがある。励まし合い、支え合い、笑顔がこぼれることで、お互いに仲良くなり、元気が出る。すべてが良い循環になる。こうした4つの施策を掲げて、まちづくりができれば素晴らしい京丹波町になる。こうしたことを頭に入れていただきながら、総合計画の策定をしていただきたい。審議会は堅いイメージがあり、なかなか意見が出づらい。

気楽な気持ちで、思うことを言っていたきたい。その中で、一つの姿がみえてくる。忌憚のないご意見をお願いしたい。今後も良いまちをつくるために、何回かのご協議をお願いしたい。

3. 協議事項

①副会長の選出について

副会長：大西委員を選出

②第2次京丹波町総合計画（後期基本計画）の策定について

○総合計画後期基本計画の策定に向けて

・第2次京丹波町総合計画（前期基本計画）の評価まとめについて

・後期基本計画（骨子案）について

事務局：「資料4・5」を用いて説明。

事務局：質問、ご意見あればお願いしたい。

事務局：特になければ、この後発言いただいても構わないので、一旦、次に移る。

・まちづくり重点施策を考えるワークショップの開催について

・後期基本計画の策定の流れについて

事務局：「資料 6・7」等を用いて説明。

事務局：質問、ご意見あればお願いしたい。

委員：ワークショップには何人ぐらい参加いただく予定か

事務局：現在、検討中である。コロナの状況もあるので、一つのチーム 6～7 人程度で、概ね 3 チームによる検討を想定している。

委員：参加いただく方の年代や、属性はどのような方か。その選定方法等をうかがいたい。

事務局：審議会の部会の中から各 3 名程度、さらに役場からチームごとに 1～2 名、住民の方数名に入っただけだと考えている。年齢については、役場からは若手職員の参加を想定している。

委員：評価について、説明の中で、指標の数が重要ではなく、そこから何が得られたのか、というところが重要というお話があったと思う。達成または改善した指標が 5 割程度ということで、それは良いと思うが、住民がどう考えているのかは拾い上げられていないのではないか。

事務局：ご意見ありがたい。住民の皆様のご意向という点で言うと、昨年度実施した住民アンケートで、総合計画の各施策分野の重要度・満足度をお伺いしている。すべての分野に設定することは難しいかもしれないが、アンケートに基づく満足度を目標指標として設定することも各課に提案・検討したい。

事務局：他になれば、次の議題に移る。

③京丹波町第 2 期総合戦略の評価等について

事務局：「資料：総合計画審議会の評価と意見」等を用いて説明。

会長：説明いただいた。質問、ご意見あればお願いしたい。

委員：コロナの関係で、これまで大切にしてきた取組でできない部分があった。具体的には、子どもたちの福祉施設における交流であるが、今年度はその取組を再開できる。また、中学生が赤ちゃんと触れ合う事業も実施できなかった。中学生が子どもに触れることで、自分を大切に、いじめにも耐える強い心をつくるといった目的の事業であった。町長のおっしゃる人材の育成にもつながる。コロナ対策をしながら、今年度は実施に向けて取り組みたい。

委員：計画のすべての項目が達成ということになれば、素晴らしい。一方で、実際はコロナの影響で達成できないという言葉で埋め尽くされている。その点が残念である。今後は、コロナの対策を十分に行い、その中でも対応できるような工夫が重要と考える。町に人が集まる、ということは非常に大切である。京都銀行の支店でも、毎朝店の前の掃除をしているが、その際、園部から福知山に向かう車の数が多く、夕方は反対に移動する。そうした方が、少しでも京丹波に残っていただけるということが重要。自身は京都の桂から来ているが、仕事時間中は町内を動いており、休みの日には京丹波町の町内を観光している。そういうことが大切であると思う。京丹波で自慢、紹介できる場所が増えれば、より良いまちになると思う。

委員：評価の結果から、コロナがいかに関に町に甚大な影響を与えているのかを認識した。お話し住宅の整備について、移住者にとって有用な取組だと思うが、先行実施されている自治体で実際に役に立っているか疑問という話を聞いたことがある。実施の上で、ニーズと結びつける工夫

が必要なのではないか。また、味夢の里のホテルとの連携で、新たなツアーをつくるという話を聞いたが、あまり参加される方がいないという話だった。ニーズにどのようにアプローチするかという点で、工夫が必要だと思う。

委員：前期基本計画の指標の達成度の評価は概ね50%というのは、進捗状況としては良いと思う。一方で、指標にあるような取組を実施した回数の評価と、住民の方の幸せ感や税収がどれくらい増えたのか、というところにどのようなつながりがあるかは見えてこない。その辺りをどう評価するかは、今後一緒に考えていきたい。また資料5の骨子案について、P4にピラミッドがあり、基本構想、基本計画、実施計画について記載がある中で、P9の主要プロジェクトや基本方針などの関係性がややわかりづらいように感じる。全体を見渡すことができるように、ピラミッドの中に主要プロジェクト等の位置づけが掲載されるとわかりやすいのではないかな。

委員：猿の被害がある。5月から升谷区は猿追いというグループをつくって、取り組んでいるが、市場でも徐々に被害が大きくなっている。悪さをする猿にアンテナをつけているが、アンテナを付けていない猿の居場所はわからない。町としても対策をお願いしたい。資料の中で、ICT技術による獣害施設の事業費がある程度設定されていたので、今後取り組まれると思っていたが、その後資料が訂正された。被害が続けば農業を続けられなくなる。猿を殺したくないので、豊かな山の環境を作る対策が必要ではないか。

委員：資料の中で、子育てに関して、中央公民館の木育ひろばをもっと活用してはどうか、というご意見があった。乳児健診で、絵本を読む機会があった際に、木育ひろばを知っているかと参加者に聞くと、知らないという方が多い。良い場所があるのに、知られていないということを感じる。木育スタートなどの木育に力を入れられているということもあるので、PRが必要なのではないか。こども園に通う子どもたちは、豊かな自然に囲まれた空間での保育を当たり前だと思っている部分もある。そうした場所の良さをしっかりと伝えていくことも重要ではないか。また、保育サークルも少ないため、木育ひろばを活用して、サークル活動を増やしていくこともできるのではないかな。

委員：今後、京丹波町は少子・高齢化が進んでいく。75歳以上の方は、自動車学校に行かないと免許をもらえないという中で、高齢者が買い物難民になるということもある。コロナの影響もあり、この春から、専業農家を止め、兼業農家になった。津田局長のところでは、高齢者の送迎といった福祉関係の仕事をしている。将来、福祉関係の資格をとって、町のためになるなら、手伝いをするのは良いことだと思う。町のことを知ることも大事にして活動している。観光協会の推薦でこの会議に参加している。国道を走っている車は最近特に増えている。京丹波町は近隣市町村に負けられないポテンシャルを持っていながら、お金につながらないところがある。観光と、食と農業をビジネスにつなげていくようなこともできないか、と考えている。また、かつてない気候の中で、暦通りに農作物を栽培できない状況がある。こういうときこそ、須知高校の出番ではないか。須知高校を巻き込んで、他の学校がやっていないことにチャレンジできる仕組みができると良いのではないかな。

委員：時間がない中で、分厚い資料をいただいても、判断が難しい事業もある。せっかく部会があるので、部会を開催してから全体会議を開いていただけるとありがたい。そうした段階があれば、理解が進み、もっと発展的なご意見も出せると思う。自身はこの町出身で、一旦東京に出た。東京では、バスや電車を逃しても、すぐに次が来る。その便利さを覚えたら、若い人は

戻ってこない。バスの本数が少なく、不便で乗らないと、バスの便数も減るといふ悪循環がある。75歳以上で免許を返した後も、不便である。交通が便利になれば、少しは町外に出る方が減るのではないか。また、町営住宅も、所得制限があったり、湿気がすごいために、入居してもすぐに出ていくという話を聞いた。若い方が、園部に住んで、町に来ているという話も聞く。お金はかかるが、改築するなど、せつかくある建物を活用していくことが必要。また、昔は、マツタケが捨てるほどとれたが最近では取れない。特産物を活かした加工食品（モンブラン等）を町内の各店舗に置くなどの工夫ができるのではないか。

委員：森林に関することと言うと、子どもの椅子のプレゼントの単価が高いというご意見があるが、町内産の木を安全に、また思い出に残る宝として利用いただくという目的の中で、値段が問題になるのはどうかと思う。昨年のウッドショックで、木材の値段が2倍になっている。また、木材価格が上がったこともあるが、一区画の森林を預かると、ある数値に達したから、ここで終わるといふわけにはいかないのが森林である。そうしたところをご理解いただければありがたい。これだけの資源を預かせていただく中で、林業大学とも連携しながら、活用していく必要がある。林業大学の8人の卒業生や、地域おこし協力隊の卒業生の方とも協力しながら活動している。また、小学校を対象とした森林環境教育を森林組合で実施している。今年度も1～6年生の76時間の講義を担当した。水がどのように山から出ているのかや、光合成などの講義をしている。すべての年齢の方に山に興味を持っていただく、ということも記載されているが、町の83%を占める森林について、教育を通して伝えることは、SDGsや2050年のカーボンニュートラルにもつながる。総合計画の各分野においては、こうしたSDGsや2050年のカーボンニュートラルの取組を上げていくべきであると考えている。

委員：女性の会も、高齢化が進んでいる。子どもたちと過ごしているという会員さんは少ない。子どもたちは大学を出て、そこで就職してしまう。町内で就職する方が少ない。介護保険だけでなく、身体を健康に保つための取組はすべて、高齢者自身が担わなくてはいけなくなっている。子どもたちが生まれ育った場所に帰ってくるのが難しい。道路が整備され、京丹波町から京都市内にも通えるはずだが、そうした方は少ない。小学校・中学校・高校生の方の中で、定住について話し合えるような場もつくっていただき、若い世代が京丹波町に定住してもらえるようにしてほしい。

委員：骨子案の人口の検証について、2060年には、5千人程度になるという数字に驚いている。少子・高齢化はなかなか歯止めが利かない状況である。今国会で、農業経営基盤強化促進法の改正が決まった。専業農家は何千万円という投資が必要になってきており、このままでは経営が成り立たない。担い手がいないことが、一つの大きな問題。これに対して、農地の集約化が必要。集落内で、農地を固めてしまう。今回の法律では、10年先を見据えて、地図をつくりなさい、ということになっている。だが、なかなか国が考えている農業と、中山間の農業とは乖離があり、難しい。また、自給率の向上が必要と思う。小麦が入ってこない中で、米粉が活用されるようになれば、コメの生産も伸びてくる。黒大豆は一反あたり6万円程度のご支援をいただけるが、作り終わった後、一旦は水田に戻すようにいわれている。せつかく畑になったものを水田に戻すのは、大変難しい。フードバレーについては、6次産業化が重要。地域で生産し、加工し、販売する総合商社的な方向が伸びていくと思う。米と同様に、現物だけ作るのでは儲からない。若者も、懸命に黒大豆を作っているが、奨励金がつくからである。儲からなければ若者は作らなくなる。有機農業については、京丹波町でも今後重要になる。こうした付

加価値をつけないと、売れない。その辺りを計画に盛り込んでいただけるとありがたい。また、町が維持され、発展するには、域外から人を呼び込むことが重要。農業をその手段に使うことも考えられる。我々は京都市内の中学校、高校の生徒たちに体験実習に来ていただき、この地域を見直していただくということに取り組んでいる。公立よりは私学が中心。人を呼び込むことが移住や定住につながる。にぎわいのあるまちづくりをするなら、人を呼び込むことが必要である。自身の竹野地域の組織について、立ち上げた理由は小学校の存続が目的だった。令和5年には小学校が創立150周年を迎える。ところが、少子化のため、来年は複複式になる可能性がある。活性化委員会の移住の実績は74名。そのうち23名は出ていかれた。移住の目的やきっかけは木造の校舎と豊かな自然である。発達障害のお子さんをお持ちの移住者の方も、竹野小学校がなくなることを危惧されている。サロンや産業部会等をつくって活動しているが、小学校がなくなれば、地域の力がなくなる。廃校にしないように、お願いしたい。

委員：総合計画の資料に目を通す中でわくわくした。京丹波町に自分の子どもたちも住み続けてもらいたい。また、お誕生日カードを個人的に作成し、各家庭に配布いただいているが、その数は年々少なくなっている。町に生まれた子どもたちが地域を愛して、住み続けてくれることが、京丹波町の活性化には一番重要である。良い事業があっても、人がいなければ意味がない。まずは住んでいただくことが大切。教育にICTが入ってきている。コロナで事業ができない状況もあった。竹野小学校の取組もテレビなどでも見ている。また、須知高校と小学校の関り、中学校との関り、学校と地域のつながりも、徐々に広がってきているときいている。アンケートの住み続けたい主な理由として、「災害の少ない安全なまち」であることなどが上がっていた。一方で、リモートワークが増えている中で、「通信環境」が地域によっては不安定であるところが、一つの住みにくさにつながっているのではないかと。また「子育てのしやすさ」のアンケート結果が前回より減少したことにも理由はあるのではないかと。また、「買い物や交通の不便さ」が前回より増えていることも、さらなる支援が必要ということの現われだと思う。人が住まなくなるとは、京丹波町がなくなる。戦略人口の達成に向けて、まずは、子育て世代をどう巻き込み、移住いただき、住みよい京丹波町で暮らし、地域を愛し、残っていただくか、というところに力を入れていくべきだと思う。

委員：須知高校は人口減少の中で、生徒数も減っており、140人のうち、京丹波町の住民は100人となっている。丹波篠山からホッケー留学ということで入学した生徒もいるが、下宿を受け入れているのは町内に1か所だけで、丹波篠山から通っている生徒もいる。京丹波町の農業法人や観光協会、地域商社と連携している。また、地元企業と連携し、新商品の開設で、ワインやチーズ、クラッカー等をつくっている。ふるさと納税の返礼品にも入れてもらっている。農地の空きもあるので、丹波栗の増産に向けた活用も検討している。フードサミット、食の祭典との連携も考えている。地元の企業の方に来ていただいて、その生產品等について講義していただいたり、インターンシップを実施することも検討している。町内で就職を希望する生徒が減ってきている状況もあるが、須知高校に指定求人を出して頂けるのは非常にありがたい。京丹波町にきていただく生徒は、園部駅からのJRバスなど、その交通費が高いという問題がある。また通学時間帯の便は残ったが、18:30以降は利用できないという状況がある。丹波町内の生徒も、須知高校に来てもらえるように、小学校とも連携している。また、生徒自身が3つの中学校を回って学校の活動状況の説明をしており、その成果も出ている。

委員：計画の指標の設定はかなり難しい。簡単に設定できる分野もあれば、何を指標とすべきか

悩む面もある。そうしたことも踏まえて、後期の計画においては、指標の見直しは重要になってくる。特に、目標値を設定するにあたって、それが達成されたときにどのような効果があるのかというところを、十分に考えていく必要がある。また、自身が丹波自然運動公園に入ってから3カ月が経つ。平成28年に京都トレーニングセンターが開設されており、ジュニアアスリートの育成などを進めている。長い歴史の中で、府内、京阪神から多くの方に利用いただいている。比較的若い方から、ご高齢の方まで、スポーツの大会が開催されている。一方で、町内で参加される方は少ない。公園を知っていただき、身近な公園としてご利用いただくのにはどうしたらいいか、ということをごろから考えている。社協とも協力しながら、地域のサロンの方に公園で食事をとり、その後役場を見学して帰っていただくような簡易なツアーのような取組を実施している。公園のマイクロバスを活用している。公園を知っていただき、役場を知っていただくという相乗効果があると思う。健康は身体だけでなく、心も健康でないといけない。京都府のエリア構想である、スポーツ&ウェルネス構想、また京丹波町のウェルネスタウン構想の実現に向けて取り組みたい。また、後期の計画にも、こうした点を反映したい。

会長：自身は区長や民生委員も担当しており、様々なところで交流をしている。町長の3本柱の人とのふれあいを感じるまちづくり、については積極的に取り組むと考えている。特に世代間の交流というところに、取り組んでいきたい。また、95歳と70歳の親子でお父さんが亡くなられたときに、70歳が独居になった家庭に、家にいるときは黄色いハンカチを玄関にかけておくようお願いした。ところが、そうすると、一人であることがばれてしまう、という指摘が近所の方からあった。このような細かいことは気にしなくてもいいのではないかと。また、認知症の方が増えている。認知症の地域の支援の推進委員と交流をしていきたい。

町長：積極的な話をしていただいた。委員がおっしゃったように、自身も毎日わくわくしている。一方で、悩みも多い。だが、全般的にはわくわく感を持っている方が幸せである。そうした意味で、若い職員には、夢を持った提案をしてほしいとお願いしている。教育について、津田委員からあった、赤ちゃんとのふれあいには共感した。赤ちゃんから高校生までの子どもが混ざり合う、ふれあうと、良いことも悪いこともみんな教わることができる。子どもなりの世界というものがある。子ども同士のふれあいが、郷土への想いにつながる。また、木育についても、どんどん利用してほしい。委員からもあったように、木育は非常に評価すべきこと。83%を森林が占めるという特質を生かした環境教育をしていく必要がある。また、嵐委員からあったように、京丹波町は交通量が多い。なんとか、その車を町の中に引き留める工夫をしていく必要がある。委員からあった、味夢の里のホテルはこれまでコロナもあり、稼働率が低かった。自身が副町長のころに、知事から話があって、すぐに設置を決断したのがこのホテルである。他の町の町長も見学に来ている。これを宝物にし、大切に、親交を図っていくことが重要である。杉浦委員の猿の被害については、今のところ追っ払うしかない。一方で、追っ払い隊に入った方は、大変。仕事をほったらかして取り組まれている。捕獲がどこまでできるか、ということもあるが、行政として取り組んでいく必要がある。また、町民が町のことを知るというのは非常に大切。自身も福知山に住んでいた時は徹底的に福知山の集落を回った。地域を知ることによって、まちを客観的に見られるようになる。委員からあった、地域の方がバスツアーを組んで、町内を回ってみる、お互いに知り合う、ということも大事である。また、稼ぐ力も重要。京丹波町には資源は多い。付加価値をつけることが政策課題である。京丹波町自体を商品化し、プロモーションしていくことが重要。地域商社も含め、稼ぐ力を身に付ける。定住にしても、

経済成長力をつけることが大事。この町に行けば、仕事があり、稼ぐことができるということが大事。また、粟や黒豆は非常に重要。京丹波町の宝である。税を投入してでも伸ばしていくことが必要。一つの投資と思えば、将来の効果を考えれば有効である。そのために、農地の集約、担い手の確保について、地域の中で話し合いをしていく必要がある。有機農業について、亀岡が新聞によく出ているが、京丹波町もほぼ同じことをやっている。また、子どもたちが住み続けたい町にするということは難しい面もあるかもしれない。だが、自身は東京に出た後、京丹波町に戻ってきた。それは、地域のつながり、温かさが何よりの魅力であったからである。これから子どもたちに何を伝えていけばいいのか、その解は現時点では持っていない。だが、子どもと話をすると、潜在的にいつかは帰ってきたいという思いを持っていると思う。それをどう引き出すか、というところがポイントである。須知高校について、地元から進学する子どもが減っていることも事実。ただ、須知高校にしる、竹野小学校にしても非常な財産であり、守らなくてはならない。京都府の教育委員会や知事にも相談しながら取り組みを進めたいと考えている。農業という素晴らしい取組をしている須知高校の存在を町内外の方にお伝えすることが重要である。国の存立には食料、エネルギー、国語の3つが必要。この世界情勢の中では食料がますます重要になっていく。今後は、関連技術をさらに発達させなくてはならないという中で、須知高校の活動の知見が重要になる。また、農地をどう守るか、ということがある。近郊でも農業をやりたいという方は多い。京丹波の農地はそうした意味で、今後狙われていくと思う。また、丹波自然運動公園について、昭和45年につくられた大変大きな財産である。施設も老朽化しているが、京都府はスポーツの施設をここに集約したいという考えを持っている。強みを生かして、経済界とも連携を深めていこうという流れもできている。人との触れ合いについても、大切にしないといけない。無観客のオリンピックでは実力を出せない。人は応援されると、実力以上の実力が出ることがある。応援し合う、励まし合う、こうした仕組みができれば、より良い町になると思う。京丹波町の住民は、すばらしい方ばかりである。コロナで孤立感が深まる中で、おせっかいをする文化がもっとあっても良いのではないか。今後もたくさんの意見をお願いしたい。

事務局：ご意見ありがたい。協議事項を終える。

4. 次回の審議会について

5. 閉会

副会長：長時間のご審議、ありがたい。貴重なご意見をいただいた。次回の審議会では、こうした意見を反映いただけると、期待している。近畿地方は昨日梅雨明けした。この猛暑が長く続くことが想定される。それぞれのお仕事、地域の行事等に取り組まれる際は、熱中症に注意いただき、暑い夏を乗り切っていただきたい。宣伝になるが、丹波自然運動公園では、3年ぶりに、ファミリープールをオープンする。昨年度はコロナの影響で中止となった。人数制限はあるが、夏にはぜひご利用いただきたい。

以上